

東海産の陶硯について

―蹄脚硯・宝珠硯を中心に―

はじめに 奈良時代最大の消費地、平城京では平城宮域から536点、平城京域から372点、寺院域から187点、合計約1100点の陶硯（転用硯を除く奈文研調査分）が出土している（『平城京出土陶硯集成Ⅰ・Ⅱ』2004・2005、以下『集成Ⅰ・Ⅱ』）。それらは蹄脚硯、圈足硯、風字硯、形象硯その他の硯種に大別されるが、主体を占める蹄脚硯・圈足硯には面径の大小のほか、硯部・脚部の形状と製作法などによる細分がある。延喜式には諸国の調に「猴膝研二口」、備前国の調に「猴膝研十八合」の記載があり、平城京には各地の窯跡産がもたらされたとみられ、それらの産地追究は、古代の焼物の供給形態を具体的に検証する手続きとして重要である。胎土、色調および技法などから東海産・猿投窯産と推定される焼物は、7世紀の飛鳥・藤原京地域にすでにみられるが、ここでは、陶硯のなかでも特殊な蹄脚硯と宝珠硯を取り上げて、使用の場を念頭に置きながら東海産陶硯について考えてみる。

蹄脚硯 蹄脚硯は硯部下端に多数の脚柱部を配し、脚柱部の下端を輪状脚台によってつなぐ形式の大型硯で、球形の脚頭と突帯状の脚節、三角錐形の脚柱とからなる脚柱部は「筭」で成形し、脚頭や脚節に木目が残る場合がある。我が国では中国初唐の誕生間もない蹄脚硯をモデルに、7世紀後半以降製作され（大阪陶邑TK43号窯例は混入と考える）、平城京出土の蹄脚硯には、中国のモデルと同様に硯部と脚部を別々に作るもの（蹄脚硯A）と、硯部と一連で成形した脚部の外面に脚柱飾りを貼り付け、脚柱間を削り取って透孔とするもの（蹄脚硯B）とがあり、後者は奈良時代中頃以降に製作技法上の簡略化として出現した。A・Bともに、胎土や脚台・脚柱の形状などの異なる多様なものがあり、複数の工房での製作が想定される。蹄脚硯は宮域出土陶硯の34%、京域出土の20%を占めるのにたいして、寺院跡からは3%と少なく、全国的にも国府・郡衙と関連施設からの出土が顕著であり、宮殿、官衙に特徴的な硯種とされ、平城宮内では第二次朝堂院内南半部、内裏東方や朝堂院の東西外郭に広がる官衙区画からの出土が顕著で、そこでは大型の圈足硯がともなっている（『集成Ⅰ』）。外見で識別が容易な蹄脚硯と圈足硯の意匠・法量の違いは使用者の位階を示す可能

性が高く、その場合、朝堂院内の第4堂以下に列する「省」次官、「寮」長官の位階が、大国・上国の守の位階と同じ「従五位」であることからすれば、蹄脚硯とは勅任官である「従五位」の官が使うべき意匠と認識されていたことが考えられる。

最下級官人には「転用硯」が支給されるから、陶硯とりわけ蹄脚硯の生産窯は、宮殿・官衙の上級官人用の焼物を生産する窯の性格をもつことになるが、蹄脚硯の製作が確認される窯は限定的で、大阪陶邑窯（KM301、TK304、MT26、TK43）と、愛知尾北窯（小牧市篠岡81、篠岡112、高蔵寺2）、愛知猿投窯（名古屋市島田古窯）、岐阜美濃須衛窯（各務原市太田1号窯）のほかは、大津京と関わる滋賀山ノ神窯、大宰府と関わる福岡牛頸窯が知れる程度で、そこでは、宮殿・国衙・郡衙の求めに応じた生産をするとともに連京・交易により非生産国の調納・使用などに供されたのであろう。加えて、窯跡出土の蹄脚硯は確認されていないが、須恵器の調納国である備前の岡山津寺遺跡出土の蹄脚硯Bを報告者が邑久窯の製品と推定しており注目される。その蹄脚硯Bの特徴は、成形時の脚先端が脚台の内端として突出し、三角錐形の脚柱内側面を大きく面取りするもので、岡山平遺跡、美作国府跡、百間川岩間遺跡、広島御領遺跡などからも出土し、平城宮で最も多い蹄脚硯Bと酷似している。平城宮出土の蹄脚硯Bの産地のひとつとして、備前の窯をあげるとき、延喜式記載の備前国調「猴膝研十八合」とはこの蹄脚硯Bである可能性が高く、蓋物を示す「合」で数えられている点を含めた検討が必要であろう。

これに対して、東海3窯跡群産の蹄脚硯は平城京出土例には多くない。しかも、蹄脚硯Aでは、直立する高い外堤で浅い海部（I182）や幅広三角形の脚柱（I163）が高蔵寺2号窯例に類似し、外寄りに三角形脚柱がつく扁平な脚台（I119）が美濃太田1号窯例に、細い脚節と丸みのある脚柱をのせた扁平な脚台（I291）が尾北篠岡112号窯例に類似するなど美濃須衛窯、尾北窯が主体で、尾張猿投窯の島田古窯の脚部に似た逆台形の脚台もあるが、極めて少ない。蹄脚硯Bにいたっては篠岡81号窯例のように、外反して作った脚裾部に脚柱飾りを貼り付けたものは2点（I329・330）があるにすぎず、蹄脚硯にみるかぎり、奈良時代中頃までの東海3窯とりわけ猿投窯は都の「官窯」としての存在ではない。

宝珠硯 宝珠硯は平面形が宝珠に似ていることから命名された硯種で、墨溜めが尖形弁の硯頭にある風字硯系（傾斜硯）と、硯面の外周をめぐる円面硯系（水平硯）の2種があり、円面硯盛行の末期から風字硯盛行の初期、すなわち奈良時代末～平安時代初めの短期間に、尾張猿投窯のみで生産されたことがあきらかになっている（植崎彰一1985）。植崎は形象硯にかわる一時的な硯として、風字硯系が先行し、のちに円面硯系が現われ、風字硯の普及によって終焉したとする。しかし、宝珠硯の初現型式は風字硯系の折戸80号窯例の如く円弧弁の数が多いもので、この形は、長谷寺法華説相図銅板の多宝塔3層の宝珠を参考にした場合、上方が尖り下方が丸い「桃形」の宝珠を両側と下部の唐草文で囲んだ形の表現と理解できる。また、本来、宝珠そのものは描かれないことが多く、宝珠が放つ火焰と座する蓮華とが宝珠の形と認識されるもので、宝珠硯の下方の円弧が蓮華座で、側縁の弧状弁と上方の尖形弁とが火焰を表現したものとみれば、円面硯系の宝珠硯についても6つの弧状弁をもつ構成のほうが、精緻で、具体的な表現といえる。猿投窯出土例では黒笹40号窯例が弁の多い円面硯系宝珠硯で、脚部が外反する圈足円面硯や鳥形硯の蓋、奈良時代中頃に近い器種構成の土器が伴出し、風字硯系の折戸80号窯例と同時期かより古く、宝珠硯の2者は当初から並存し、それらの簡略形として黒笹3号窯例や黒笹76号窯例など3弧弁の宝珠硯が作られたとみられる。

宝珠硯の同範関係 平城京出土の宝珠硯の多くは、円面硯系で、平城宮内膳司地区（I 21）、東方官衙地区（I 66）、宮東南隅のSD3410例（I 144）、左京三条二坊長屋王邸北のSD5100と重なる地区（II 286）、興福寺一乗院宸殿下層（II 531）、興福寺第321次調査（II 543）、薬師寺西小子坊（II 586・587）の7点8片があり、他に奈良市調査の大安寺跡例などがある。また、風字硯系には右京八条一坊SD1412例（II 141）、左京七条一坊十六坪例（II 339）がある。ほかに円面硯系には長岡京右京六条二条四坪の自然流路、同二坪の井戸SE02、平安京右京六条一坊邸宅跡からの出土例がある。

平城宮出土の宝珠硯は型作りで、2種の範があり（『平城報告Ⅶ』）、長岡京出土の宝珠硯もこれと同範とする（松田留美1997）。平城京出土例を改めて仔細に観察し、同範の根拠と特徴を確認した結果、範A（I 21・I 66）は既に

指摘のある長岡京例に加えて、興福寺一乗院例（II 531）、薬師寺西小子坊例（II 586・587）とも同範の可能性が高いことが判明した。硯尻側硯面周縁斜面の範小口の木目、その前面海部の平行する木目、内堤弧状弁の直線化した個所や、硯面の随所に残る長軸方向のかすかな段差が一致する。また、外堤の一部には粘土の充填が不十分なために生じた空隙がみられ、それらの痕跡から、範は長軸方向に木目を通る木製で、海部底面を原面とする板に外堤、硯面・内堤を彫り込んで製作したことが判明する。（なお、『集成Ⅱ』は薬師寺例I 584を左側弧弁とするが、木目から硯尻右側が正しい。）範B（I 144）は長屋王邸跡（II 286）と同範で、範Aとは硯面径がやや大きく海部が狭いこと、硯尻の弁が他の弁よりも小さい点で異なる。今ひとつの範は興福寺第321次例（II 543）で、丸みがある尖形弁で、硯面の彫り込みが浅く、海部が広い特徴は、黒笹40号窯例と酷似する。以上の平城京出土宝珠硯7点が3つの範からなり、同範の陶硯が宮殿、邸宅跡地、寺院の別無く出土する事実は、宝珠硯の供給形態や用途を考える上で重要で、そこには、使用者の個人的嗜好に帰する「雅硯」の概念は入りえない。あえて推測するならば、亀形・鳥形・羊形・宝珠形は「水」に関わる瑞象として同じ役割を果たした可能性があり、例えば請雨、止雨のような宮殿、寺院の別を問わず執り行われる祭事（仏事）に関連して発注された硯との想定が可能で、尾張猿投窯でのみ生産されるのは当初の発注が固定化した結果であろう。弧弁数の減少は簡略化あるいは祭事執行者の階層差によるものと考えたい。

東海産陶硯について 東海産の焼物は、7世紀後半以後の飛鳥地域などで多く認められ、都向けの生産窯としての性格が、古くに遡る可能性が考えられた。しかし、平城京出土陶硯の検討からは、奈良時代中頃には陶邑窯や備前窯の存在も顕著で、美濃・尾北窯もその一員としての存在であった。宝珠硯の猿投窯への集中は、他の器種よりも古く、それは調納とは別の祭事（仏事）用品の発注を契機とし、その後固定化したものと考えられる。

（西口壽生／客員研究員）

参考文献

植崎彰一「古代陶硯に関する一考察－有孔把手付円面硯と宝珠硯－」『名古屋大学総合研究資料館報告第1集』1985。
松田留美「長岡京出土の陶硯」『（財）向日市埋蔵文化財センター年報「都城8」』1997。